一ノ鳥居

一ノ鳥居は、若宮大路に沿う鶴岡八幡宮の表参道の入口を示しています。一ノ鳥居は、海岸から約 500 メートルの所で通りをまたいでおり、高さは 8.5 メートルあります。鎌倉市の中心部を横切る目抜き通りである長さ 1.8 キロメートルの若宮大路沿いには 3 つの鳥居があり、一ノ鳥居はその中で最大のものです。若宮大路は、鎌倉幕府を立ち上げた源頼朝（1147-1199）が作らせたものです。頼朝は、自らの政権を置く場を、日本の中心として、朝廷のある京都に基づいた設計にしようと考えました。京都では、朱雀大路という中央通りが市の南から内裏までを貫いています。頼朝はこの構図を鎌倉でも作り上げようと、若宮大路が鶴岡八幡宮まで続く設計を考えました。一ノ鳥居は 1180 年に完成し、続いて若宮大路は 1182 年に完成しました。一ノ鳥居は何度か再建されています。

伝説によると、現在の石の鳥居は徳川幕府 2 代将軍の徳川秀忠（1579-1632）の妻であった江与（お江与とも、1573-1626）が主導して作られたものです。八幡神が彼女に現れ、大きな鳥居を作れば息子に恵まれると約束したとのこと。江与と将軍は、遠い備前国（現在の岡山県）から高品質の花崗岩を取り寄せました。鎌倉まで船で石を運んで鳥居を立てるのは、いざ取り掛かってみると大変時間がかかる作業でした。江与は息子に恵まれました。息子の家光（1604-1651）は父親の後を継いで 3 代将軍となりました。しかしやっと鳥居が完成したのは、秀忠と江与の孫である徳川家綱（1641-1680）が徳川幕府 4 代将軍となっていた 1668 年のことです。この大きな石の鳥居は国の重要文化財に指定されています。